

第21回群馬県図書館大会

報告書

群馬県図書館協会

目次

大会概要	2
式典・表彰式 主催者挨拶	3
来賓祝辞	4
表彰式	5
集合研修 報告	7
講演	9
アンケート	17
大会参加者数	20

第21回群馬県図書館大会

テーマ：「マンガへのアプローチ」

日時：令和7年10月30日(木) 11:00～16:30

《動画配信期間》 12月12日(火)～12月24日(木)

会場：群馬県立図書館 3階ホール

○式典・表彰式(11:00～11:45)

【主催者挨拶】 群馬県図書館協会長(群馬県立図書館長) 吉澤 隆雄

群馬県立図書館 特別館長 岩瀬 春男

【来賓祝辞】 群馬県教育委員長 平田 郁美

【表彰式】 ・優良図書館群馬県教育委員会表彰

・群馬県読み聞かせボランティア顕彰

・第58回全国優良読書グループ表彰(伝達)

・全国公共図書館協議会表彰(伝達)

○集合研修(13:35～16:25)

【事例報告】 「蔵書再構築～マンガ文化拠点の挑戦～」

坂庭 健司 氏(太田市立新田図書館 館長)

【講演】 「図書館におけるマンガの可能性」

みさき 絵美 氏(マンガ司書)

【トークセッション】 アドバイザー：坂庭 健司 氏 & みさき 絵美 氏

《主催》群馬県図書館協会

《後援》群馬県教育委員会

式典・表彰式

主催者挨拶

群馬県図書館協会長

(群馬県立図書館長)

吉澤 隆雄



群馬県図書館大会を開催するにあたり、群馬県図書館協会を代表して一言御挨拶申し上げます。

本日、第21回群馬県図書館大会の開催にあたりまして、県内各地から館種を越えて多数の御参加をいただき、誠にありがとうございます。また、群馬県教育長様をはじめ、御多用の折にも関わらず、御臨席を賜りました来賓の皆様へ、改めて御礼申し上げます。

そして、今回めでたく受賞される皆様へ、お祝いを申し上げますとともに、長きに渡る県内の図書館並びに読書振興への御貢献に心から厚く御礼申し上げます。

群馬県図書館大会は、平成15年の第1回以来、県内図書館関係者の研鑽の場、研究発表と情報交換、ネットワークづくりの場として開催してまいりました。

新型コロナウイルス感染症対策の観点から、動画配信形式へ変更した時期もございました。しかし、リアルな人間同士の触れ合いを改めて重視し、図書館振興の機運を醸成するという大会本来のねらいを十分に発揮するために、再びこうして対面での開催ができることをとても喜ばしく思っております。

さて、県内では、令和7年2月に太田市立新田図書館がリニューアルオープンしました。新館は、15,000冊のマンガを所蔵し、県内公立図書館では最も多くのマンガ所蔵数を誇る館として開館しております。そこで今大会では、「マンガへのアプローチ」をテーマに、新田図書館の事例報告と、マ

ンガ司書のみさき絵美さんの講演から、図書館におけるマンガの活用について意見を交わしたいと考えています。

第21回群馬県図書館大会が、皆様とともに図書館の新たな一歩を踏み出す契機になることを願ってやみません。またその一助になれば主催者としてこれ以上の喜びはありません。

最後になりましたが、講師の皆様、大会の開催準備に御尽力くださいました関係の皆様へ心よりの感謝を申し上げ、開会にあたっての御挨拶といたします。

主催者挨拶

群馬県立図書館

特別館長

岩瀬 春男



群馬県立図書館 特別館長の岩瀬と申します。皆さん、群馬県立図書館へようこそ！そして、本日、表彰を受賞される皆さん、誠におめでとうございます。

皆さんには、日々の仕事やボランティア活動などを通じて、地域社会、学校、大学などそれぞれのコミュニティにおける知的基盤である図書館の発展に御尽力いただき、心から感謝申し上げます。

群馬県立図書館では、県内の中核図書館として、新たに市町村図書館訪問相談事業を開始いたしました。引き続き、皆様との連携・協力を努めてまいります。

図書館の未来

さて、県内35市町村のうち、12町村に公立図書館がありません。そのような状況の解消に向けて取り組むのも県立図書館の役割と考え、令和5年度以降、未設置町村を訪問し、

予算編成権を持つ町村長、社会教育を所管する教育長に直接お会いし、図書館の設置をお願いしています。建物ではなく、図書館設置条例を制定してほしいという願いです。

町村長は皆さん、図書館の必要性や重要性を理解されており、その上で、図書館を設置するメリットは何かと、必ず質問されます。未設置町村には、公民館図書室があって、県立図書館がセンター機能を担う県内図書館情報ネットワークに参加し、相互貸借も可能なことなどが質問の背景にあると考えています。

私からは、著作権法に基づく資料の複製、国立国会図書館の図書館向けデジタル化資料送信サービスなどは、図書館が対象で、公民館には認められていませんと答えています。

図書館を設置するメリットは、それだけでしょうか。

見方を変えて、図書館の存在意義は、何でしょうか。

予算削減、読書時間の減少、資料のデジタル化、デジタルデータで作成・公開され、紙などの印刷物を持たないオープンデジタル資料の増加、生成AIの急速な進化など、図書館を取り巻く環境が大きく変化しています。資料の提供やレファレンスなども含め、将来的に、人間が関与する図書館の仕事は、ますます少なくなるでしょう。

もちろん、資料や情報を収集・整理・保存・提供する必要性や機能は、不変だと思います。

しかし、物理的な図書館は、生き残れるでしょうか。

これからの図書館に大切だと考えること

今こそ、図書館は、地域社会、学校、大学などそれぞれのコミュニティに対して何ができるか。図書館という知的基盤、社会基盤がコミュニティになぜ必要か、どのように維持するかの基本議論をきちんと共有する必要があります。

人と人とがつながること、他の組織とつながることは、人間固有の営みだと思います。

未利用者へのアプローチ、博物館（Museum）、図書館（Library）、文書館（Archives）の3分野が協力・連携する、いわゆるMLA連携、図書館同士で連携した企画展示など、できること、やるべきことはまだまだあります。

定期的な仕事に流されがちな毎日ではありますが、図書館

がなぜ必要か、図書館に何ができるか、そしてこれからの図書館に大切なことは何かについて、私たち一人一人が、職場で、設置者も含めた組織で、そして、それぞれのコミュニティで考え、議論すべきだと思います。

本日の図書館大会を、図書館の未来に向けた第一歩にしたいと思います。

引き続きよろしくお願いいたします。

来賓祝辞

群馬県教育委員会

教育長 平田 郁美 様

本日、第21回群馬県図書館大会が、県内各地の多くの関係の皆様のご参加のもと、開催されますことをお慶び申し上げます。また、本日表彰並びに顕彰をお受けになられる皆様にお祝い申し上げ、それぞれの分野において、優れた活動を活発に展開されていますことに、心からの敬意と感謝を申し上げます。

さて、群馬県教育委員会では、令和7年度から令和11年度を期間とする「群馬県読書活動推進計画（第2次）」を令和7年3月に策定いたしました。「生涯にわたるウェルビーイングの向上につながる読書活動をめざして～主体的な学びにつながる読書環境の充実～」を基本目標に据えております。これからの時代、私たちは社会変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることが求められます。そうした中で、読書活動は、読解力や想像力、思考力、表現力等を養い、「新しい時代に必要となる資質・能力」を育むことにつながります。県立図書館にとどまらず、家庭や地域、学校など多様な場での読書活動の推進には、様々な関係機関との連携・協力体制の構築が必要です。引き続き、皆様方の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

本大会のテーマは「マンガへのアプローチ」と伺っています。マンガは子どもから大人まで幅広い世代に読まれてお

り、新たな学びの入り口や本に親しむツールになる可能性を秘めています。

本日は、マンガを通じた新たな図書館の取組状況の事例報告や、マンガを活用した図書館サービス等の可能性についてご講演いただくとのことです。

皆様には、多様な利用者のニーズに応える図書館づくりへの新たな視点をいただければ幸いです。

また、館種を超えて県内の図書館関係者が一堂に会する機会ですので、互いの知見を共有しながら、共に考える活発な意見交換の場となりますことを期待しております。

結びに、本大会の開催にあたり、御尽力いただきました関係者の皆様、御多用中のところ御参加いただきました皆様へ感謝申し上げますとともに、本大会が実り多いものとなりますことを祈念申し上げ、祝辞といたします。

表彰式

《優良図書館群馬県教育委員会表彰》



邑楽町立図書館

《群馬県読み聞かせボランティア顕彰》



池田よみきかせの会



豊秋小学校 お話の会“クローバ”



芝根小学校読み聞かせボランティアの会



黒保根学園 読書支援隊



太田市立強戸小学校読み聞かせボランティア

表彰伝達

《第58回全国優良読書グループ表彰》
(公益社団法人読書推進運動協議会)



太田市美術館・図書館「ウーフ」

《全国公共図書館協議会表彰》
(全国公共図書館協議会)

前橋市立図書館 柴崎 純子 様 (欠席)



みどり市立大間々図書館 森 幸子 様



集合研修

報告

蔵書再構築 ～マンガ文化拠点の挑戦～

講師：坂庭 健司氏
(太田市立新田図書館 館長)



はじめに

講師は、合併前の旧新田町時代に入職。以来、道路整備工事、道路の維持補修工事、下水道管路工事、公園街路樹等の維持管理業務委託の発注等の業務を担当。

令和6年4月から現職。

新田図書館の概要

旧新田図書館は、昭和55年に建設。老朽化による建て替えを契機に保健センターや行政窓口を統合した複合施設「エアリススペース」が建築され、同施設に移転となる。

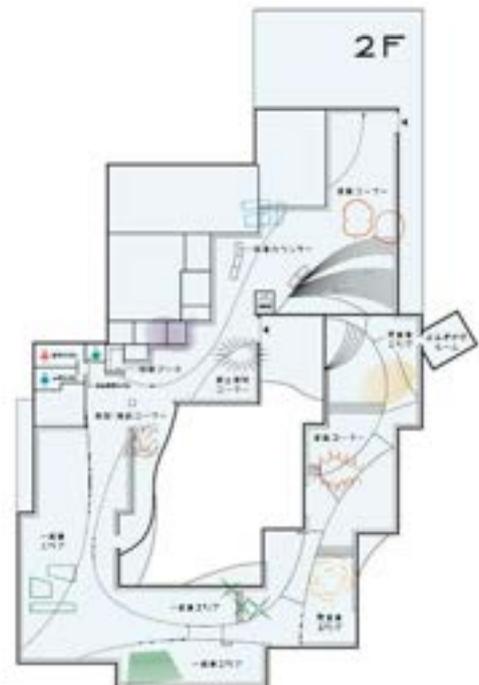
施設集約による効率化と市内西地区のにぎわい創出を図ることを目的に建築され、令和7年2月23日オープン。オープン当日は、記念式典、オープニングイベント開催。約2900人が来館。

新田図書館内の様子

施設入口から図書館内へ入ると、スロープが中央に配置され、館内へと誘導する構造となっている。エントランス右手にはマンガの一部が置かれており、その奥に特集コーナーが設けられている。

スロープを進むと絵本棚があり、その奥に読み聞かせ室が配置されている。左手に見える大階段は、2階のマンガコーナーおよび図書カウンターへつながっている。

壁面および置き書架がすべてマンガで構成されており、コーナーの一角には靴を脱いで利用できるくつろぎスペースが用意されている。非常に人気が高く、休日には満席となることが



多い。満席時には大階段の端に座る利用者や、館内各所に配置されたクッションを利用して読む様子も多く見られる。

マンガ導入の経緯

太田市には中央図書館、尾島図書館、藪塚本町図書館、そして新田図書館と4つの図書館がある。老朽化に伴う建て替えを検討するなかで、当時の市長から、特徴ある図書館として「マンガを揃える」というような提案があった。また、新田エリアの新施設に対する寄付金があったことと重なり、マンガの収集が決定した。

マンガの選書基準

当時の図書館職員で協議し、基準を設け、選書した。現在もその基準で選書を行う。

○マンガの選書基準

- ・日本のマンガ史上重要とされているもの。
- ・各時代を代表するもの。
- ・社会的評価を得ているもの。
- ・各種マンガ賞を受賞した作品。
※必須条件ではなく、選定にあたり考慮する。
- ・演劇など他の芸術領域に影響を及ぼしている作品。
※ 必須条件ではなく、選定にあたり考慮する。
- ・太田市にゆかりのある作品及び太田市を舞台とした作品。

○収集対象外とするもの

- ・露骨な暴力・性表現を主題としているもの。
- ・反社会的・非道徳的な事柄を描くもの。
- ・人種や差別について配慮を欠く描写があるもの。
- ・廉価版として刊行されたペーパーバック。

基準に従い、令和5年中に館用としてマンガを購入した。

マンガの選書、購入、配架

令和5年 新館用に15,000冊購入。

令和7年度、続刊中心に800冊程度購入。

今後も続刊購入を継続しつつ、新たなタイトルの購入も予定。

なお、配架にあたり、装備は職員が行っている。

利用状況の推移

○来館者

・年間

旧館：令和4年度 84,000人
5年度 82,000人
6年度 50,200人（10月31日まで）
新館：令和6年度 29,300人
（オープン後1か月程度）
7年度 111,000人（9月末現在）

・月平均

旧館 7000人/月
新館 18,000人/月・・・2.6倍

・日平均

平日 旧館 240人/日 新館 600人/日
休日 旧館 400人/日 新館 1,100人/日

○貸出数

4年度 図書 170,000冊、視聴覚 32,000点、計 205,000点
5年度 図書 174,000冊、視聴覚 32,000点、計 206,000点
6年度 図書 120,000冊、視聴覚 24,000点、計 147,000点
（移転のための休館期間あり）
7年度 図書 107,000冊、視聴覚 21,000点、計 128,000点
（移転後から9月末現在）
なお、旧館 17,000点/月、新館 21,000点/月、1.2倍増。

○利用年齢層の推移

貸出利用の年齢層に、大きな変化なし。

○広がる来館の輪

来館者数2.6倍に対し、貸出数1.2倍、貸出年齢層変化なしの因果関係については、現在マンガは館内閲覧のみで貸出をおこなっていないため、貸出数や年齢層には反映されないと考えている。また来館者については新施設見学の来館者も多いといった点が考えられる。

開館後8ヶ月経過したが、市内外、隣接県外から右肩上がり増加している。

おわりに

今後もマンガの続刊や新資料の充実を予定。来館を待っている。

講演

図書館におけるマンガの可能性 講師：みさき 絵美氏 (マンガ司書)



<はじめに>

◆講師紹介とこれまでの経緯

「マンガ司書」は講師がマンガのコラムやマンガ賞の選考委員を、個人の立場として受ける時に名乗っている自称である。

子供の頃から本好きで、図書館司書の資格を取った。学生時代に公共図書館でアルバイトをし、市立公共図書館に就職。その後、市立、区立、都道府県立の図書館に勤務した。

趣味として読んでいたマンガや好きなアニメに関わる図書館の仕事をしたと思うようになり、大学のマンガ専門図書館の求人に応募し、5年間、マンガ専門図書館に勤務した。

任期満了の時点で、マンガと図書館に溝を感じ、さらにマンガのことを勉強しようと、マンガの企画を手掛ける一般社団法人に勤務。民間を経て、その後、現在の美術館に勤務し、現在は、マンガの原稿、アニメやゲームの制作の過程でできる資料をどうアーカイブしていくかを考える仕事に携わっている。

図書館とマンガに関わってきた経験や、本・マンガを紹介する機会もあり、図書館という館を離れても、図書館とマンガについて考えていきたいと思い、「マンガ司書」を名乗っている。

<1. マンガを取り巻く現状>

◆マンガとは

マンガというと、絵がありセリフの吹き出しがあり、そこにテキスト文章が入っている、コマで区切られていて、それが連続して読むことができるというストーリーマンガが思い浮かびやすい。それ以外にも、新聞によくある4コママンガ、一枚絵のもので風刺画もマンガに入るし、マンガはとても多彩な表現がされている。

マンガの起源がどこからというのはなかなか難しいところで、何かを模して描くということまで考えると、かなり前に遡ることもできる。今の風刺の影響など、その流れは明治時代

に日本が海外からの影響を受けて発展したのがポイントになるのではないと言われる。マンガは日本だけでなく、世界各地でマンガの表現がされている。国内外の様々な事柄と影響しあい、今の形になっている。京都国際マンガミュージアムが監修・編集の『マンガって何?』は大変まとまっていてわかりやすい。

◆販売や動向について

『出版指標年報』（2025年版）から、マンガ出版界は右肩上がりに増加していることが読み取れる。傾向として、紙の雑誌や単行本は下がり、電子で読むマンガがよく読まれ上昇しているため、業界全体としては増加を続けている。実際の作品が読まれるほかに、メディアミックス、例えばマンガが原作のドラマや映画が広がり大変多く利用されている。今、海外から日本のマンガが大変注目されていると言われるが、実際のところ海外の方がまず触れるのは、アニメになってからが多い。アニメが大きく受け入れられて、その元に日本のマンガがあるという形。最近だと伝統芸能である歌舞伎や能でもマンガを元に行っているものもある。

◆国の取り組み、自治体の特色、国外

2024年文化庁は、「マンガアニメ特撮ゲーム等の国際的な振興拠点を考える会議」を開催。2025年経済産業省は、「エンタメクリエイティブ産業戦略」の中で、マンガについての戦略を示している。

都道府県レベルで鳥取や高知、熊本、岩手などでマンガについてのプロジェクトを自治体の特色として取り組んでいる。

国外では、2023年フランスで行われた「カルチャーパス」制度で、若者にお金を助成し、文化的なものに使うことを推奨した結果、日本のマンガがよく読まれたようだ。その流れを受け、2024年フランスのポンピドゥー・センター（国立近代美術館）で、マンガをテーマにした展示が行われた。同展ではフランスのマンガ、アメリカのマンガ、そして日本のマンガも大きく取り上げられた。韓国では、韓国コンテンツ振興院を設

け、国としてマンガを振興している。韓国発と言われるが、「WEBTOON」という縦スクロールのマンガが大変読まれている。

◆文化、娯楽から学術へ

マンガが国内外で大変読まれているが、「マンガなんて」と言われた時代も長かった。「マンガなんて一時読んでいくもの、長く読むものではない、ましてや公共の施設で取り入れるものではない」という印象も大きかった。今は、一時読む娯乐的なものから、みんなが好き、広い年代に読まれるという文化に、さらには学術として取り組むという動きも深まっている。京都精華大学の国際マンガ研究センターではマンガを研究している。熊本大学でも国際マンガ学教育研究センターを立ち上げた。このように世界的な普及があって、娯楽から文化になり、そして学術へと深まってきている。

< 2. マンガと図書館のマッチング >

◆図書館での取り組み方

図書館専門誌『図書館雑誌』（昭和9年7月号）に全国図書館大会の記録が掲載されている。公共図書館部会の座談会で（児童の図書普及について）「児童室へ来る子供は童話やマンガばかりを読んでいるように私には見える。それで図書館へ行くことをあまり喜ばぬ親もある」と記載がある。昔から「マンガなんて」と言われていたのはわかるが、91年前もそうだったことに改めて驚いた。

図書館界でのマンガの取扱いに関する論文が出されている（2012年、2024年）。公共図書館における収集方針や取り組みについて着目し、かつ図書館司書になる人に向けて、マンガの取扱いの現状や課題を見ていこうともしている。

近年では、図書館に関する機関紙『ライブラリー・リソース・ガイド』（2018年）、日本図書館協会でも『学校図書館とマンガ』（2022年）、『図書館のマンガを研究する』（2024年）などでも取り上げられている。

◆国内

国立国会図書館もマンガ（雑誌も単行本も）を所蔵している。納本制度があり、マンガもその対象。ただ、納本が抜けている場合もある。

国立国会図書館は資料の長期保存が目的で、雑誌にカバーをつけて合本という形にしている。細かいことだが、本の雑誌の背が見えにくく、裏表紙に記載された号数が確認できないこともある。コミックス単行本について、カバーを除去して保存されている。国立国会図書館に行ってコミックスを書庫出納してもらおうと、読むことはできるがカバーはかかっていない。マン

ガにとって、絵や表紙は重要な表現である。国立国会図書館であっても、利用者が望む状態で資料が保存され、全てのマンガ資料の利用ができるという状況ではない。

広島市立まんが図書館について、広島市は、市内にいくつも公共図書館があり、マンガに特化したマンガ専門の館もある。1997年、マンガを収集して利用者に貸し出すサービスを開始。予約も貸出も可能で一般的な資料として利用。当時、反響が大きく利用数がとても伸びたため、2年後に2館目のマンガ専門図書館をオープン。現在2館で22万冊を所蔵。

福島県の白河市立図書館では、マンガへ大変よく取り組んでいる。『ライブラリー・リソース・ガイド』（第24号）に掲載があるが、「開館時に、自館蔵書の10%までマンガを持つということを決めた。世の中で出版されている出版物のマンガの占める割合を考えて、10%と定めた」そうだ。Yahoo!ニュース（2025年5月9日）の飯田一史さんがまとめられた記事も、非常に参考になる。

他にも図書館ではないが、札幌市では、マンガ等のポップカルチャーを活用した街づくりに取り組んでいくことが発表されている。

明治大学は、米沢嘉博記念図書館（マンガ評論家で、同人誌の即売会にも長く関わっていた米沢嘉博さんが持っていたコレクション）と、現代マンガ図書館（貸本屋から始められ、自分で長く私設の図書館を運営していた内記稔夫さんが持っていたコレクション）、その2つを合わせて明治大学のマンガ図書館としてコレクションを所蔵している。

米沢嘉博記念図書館在職中、「マンガ図書館ってどういう人が利用するの？」と質問を受けた。私が考える利用者のタイプと利用目的は、以下のとおりである。

1. フラツと楽しみに来る利用

米沢嘉博記念図書館は展示のスペースもあり、「マンガ展を何かやってるな」と来館される方、またはご家族連れで、「一緒にマンガ読もうと思ってきた」と来館される方。

2. 目的が明確な利用

特定の先生の特定の作品の特定号を目指して来館されるファンの方。

明治大学マンガ図書館は、明治大学の学生はもちろん無料で利用できるが、一般利用も受け入れている。（一般の方は、展示室以外の場所は有料）。過去に、利用者が「この本が読みたいです」と来館した時に、「明治大学と国立国会図書館はともに東京都内、国立国会図書館は無料でお得かもしれませんよ」というお話を差し上げ

た。すると「国立国会図書館にも行った」とのことだった。ただ行った時に、見たかった雑誌の表紙の、ちょうどご自身のお好きなキャラクターの上に管理用のハンコがかかっていたそうだ。「顔にハンコがかかっていたんです」とすごく残念そうに言っていた。明治大学マンガ図書館の特徴として、できるだけ表紙やカバーに、保管類のシールを貼らない、ハンコなどを押さない状態で保存しているの、それを知っていて、「ここなら私が見たかったものが見られると思って来ました。」と、ご利用になった。改めてマンガの資料を保存しておくときに、絵とかそういったものがとても大事になるのだと感じたエピソードである。

3. 学術の利用

明治大学では国際日本学部という、マンガやアニメ、ゲームなどに注目した学部があり、その生徒が利用することもある。文学部生がマンガの中で取り上げられる語彙に注目して調べたり、経済関係の学部生が暮らしの流れを把握する資料として読みたいという利用もある。学術利用とまとめたが、国内外からの利用、大学で学んでいる生徒や職員と様々な視点から利用がされている。

学術利用時に印象的なのが、1冊ではなく、比較して読まれることが多い点である。2つの資料を比較する、雑誌など1年という長い期間を順番にチェックしていくという利用がされていた。特徴的なのは、マンガ分野の研究は、研究所や大学に属している方ばかりではなく、自分の興味・関心として調べていきたい、深めていきたいという方もたくさんいる点。そのニーズに応える場として、図書館はとても有効である。

4. 商業利用

マンガに関する記事を書くために、マンガについて調べに来たライターや記者の利用もある。出版社であれば、基本的には自社で資料を所有しているが、それでも自社で欠本があり確認のため出版社の方が調査に来た例がある。愛蔵版出版のため再度原稿起こしをした、テレビ局からの調査にも協力をすることもある。

マンガ図書館にいる間、マンガの資料は楽しみとして読むだけでなく、様々な利用がされていることを体感した。

◆海外での図書館の取り組み

2025年3月文化庁のセミナーにおいて、アメリカの全米図書館協会の参加者アンケートについて触れられていた。「まったくMANGAを所蔵していない図書館は6%だった」という結果が出た。フランスはバンド・デシネ（フランスやヨーロッパで

のマンガの形式）のデジタル化画像を電子図書館として公開するといった動きや、韓国ではマンガに特化した公立の図書館が開館。台湾では国家マンガ博物館が先行オープンし、2029年に全面オープン予定で、本なども対象にして保管していくとのことだ。

◆群馬県内の図書館を巡って見えたマンガの可能性

群馬県図書館大会での講演を機会に、群馬県の図書館を巡ることにした。23か所の公共図書館を巡った。感想など少し話す。*以下、県内の図書館巡回の様子については斜線表記とする。

群馬県内のマンガ所蔵状況

新田図書館は、とてもたくさんマンガの資料を活用されている。

群馬県立図書館は、マンガのコーナーや郷土のコーナーにマンガを置き活用をされていた。

高崎市立の図書館では、まとまったマンガのコーナーを講師は見つけることができなかったが、学習マンガなどの所蔵はされていた。

上野村の図書館は、はっきりマンガコーナーを設けて新しい作品も入れている。

移転オープンした藤岡市立の図書館にも、マンガのコーナーがあった。

例えば学習マンガやエッセイマンガ、そういったマンガも含めると、マンガを1冊も持っていない図書館はなかった。マンガコーナー設置の有無、取り組みに違いはあれ、マンガは所蔵してある。マンガは他と区別なく、普通の資料として取り扱われている傾向が強くなってきているように思う。あって当たり前の資料をどう活用してもらうかという段階に入ってきているのではないかと感じる。

<3. 現場の懸念と対応>

◆装備・修理

「マンガは壊れやすい」と言われる。確かにその傾向はある。単純によく読まれるから劣化が激しいのでは思う。

広島市立まんが図書館は、自館で装備されているそうだ。マンガが納品されたら、綴じのところを大きなホッチキスで止める。ホッチキスを止めると膨らむので、金槌で叩いて伸ばして、カバーを戻した上から透明のフィルムをかけるというのを、1冊ずつやっているそうだ。

国立国会図書館は、破損した単行本は主に無線綴じで資料を綴じ直し、破れたページは和紙で補修しているそうだ。

長期保存を前提にすると、手間や準備が必要な本格的な

修理になるのではないか。

修復は保存期間や利用方法を考えて、意識して適切な道具を使いたい。

◆選書1

図書館で所蔵するマンガ選びは悩むところだ。ここで（講演の）冒頭を振り返るが、91年前の段階では、童話もマンガも、保護者が眉をひそめるようなニュアンスで語られていた。今、童話について「童話ばかり読んで」と言われることは、おそらく少ない。ではどこで差ができたか。童話、児童文学は、図書館の中からの取り組みが積み重なってきたと思う。それは地域の方や図書館の方、また児童文学を研究する方が繋がって取り組みを行い、研究を積み重ねてこられたからではないか。対してマンガは、娯楽だから読まなくていいとか、自治体で娯乐的なものを所蔵するなんて、というイメージもあり、残念ながら今に至っても、事例が積み重なっていないところだと思う。とはいえ、マンガは大変多くの人に好まれているというのも皆感じているところではないだろうか。

そういった中で何を選ぶか。白河市立図書館では、たくさん実例を紹介している。（前述 P10 参照。）『学校図書館とマンガ』（日本図書館協会／2022 年）や、「全国学校図書館協議会図書選定基準」ではマンガの選定基準を公表しているし、選定図書を出して、その中にマンガが入っていることもある。

図書館専用の選書のツールというわけではないが、取り組みの一つとして例に挙げられやすい一般社団法人マンガナイトによる『これも学習マンガだ！』は、いわゆるエンターテインメントのストーリーマンガの中にも、学びにつながるものがある、マンガの持つ楽しさ、分かりやすさ、共感力というところに着目して紹介していこうという事業。講師の過去の勤務先でもあるが、勤務開始以前から事業を行っており、その後、2025 年も企画展と連動して 11 作品を追加するなど、今も少しずつだが作品が増えている。また、事業の取り組み例として小学校のレポートが載っている。2019 年の例だが、小学校での例として参考になると共に、対象年齢に沿ったマンガを選ぶというのは難しい点も感じる。

学校でも親しまれている、学習マンガを気にする声がある。

おりしも国立科学博物館（東京上野）で企画展「学習マンガのひみつ」が開催されている。学習マンガの発展から経緯が見られる展示。その中で今の傾向として、学習マンガにも娯乐的なエンターテインメント的な要素が入ってきていて、またストーリーマンガ、エンターテインメントのマンガの中にも、学び

という要素が入ってきていると触れられていた。ミックスが進んでいるという現状だ。

群馬県の図書館も巡っていると、新しい作品をたくさん入れている図書館がいくつもあった。神流町や邑楽町、それから沼田市の図書館などは、新しい資料をたくさん入れていたし、借りられる状態で置いていた。海外のマンガにも目配りしているのがわかった。

たまたま休館で入館がかなわなかったが、千代田町の図書館はホームページで学習マンガの特色をきちんと意識させていることがわかり、見学したいと思っていた。「ひみつシリーズ」という学習マンガについてだ。ひみつシリーズは1つのテーマについて解説をする内容になっている。そのなかに、テーマごとに1つの会社が協賛して資金を出し、本を作っているシリーズがある。ある意味、企業の広報活動の一環とも言える。そういう事情があって作られていることを認識しておくのは大事だ。企業が資金を出して作られるシリーズは、本屋で買わず、寄贈されているが、違いがあることがホームページに明記されていた。必ず書いた方がいいということではないが、はっきり特色を知って所蔵されているのが分かった。

みどり市立笠懸図書館、吉岡町の図書館で、マンガの選書についてお話を伺う機会があった。管内で同じマンガが被らないように調整している、雑誌などのマンガ紹介を参考にしている、職員間での情報共有をしている、そして複数人で選書しているとのこと。

複数人での選書はとても大事である。決まった選書ツールがない状態だと、人の意見を聞くことはとても参考になる。できたらネットワークを作って他館の方と意見交換ができる場所があるといい。そういう意味で今日の群馬県図書館大会で、マンガについて共有を深めていこうというのは、とても貴重な機会だと思っている。

◆選書2

選書の情報源について。YouTube などでも情報を発信される方がたくさんいる。海外コミックスのブックカフェを大阪でやってらっしゃる方や、翻訳者の方が一緒に海外マンガについてテーマなどを挙げて紹介しているものなどもある。

さて、選書のこれからを考える課題として、選書の情報源の難しさのほかに、読者層への意識も重要だ。商業的なマンガは、読んでもらいたい層やターゲットを決めて作品が作られている。流行し、面白く、多くの年齢層に読まれているが、実は元々大人向け作品ゆえに暴力描写があり驚くこともある。ターゲットとして想定されている読者層を認識する方法として、単行本やコミックスの作品がもともと掲載されていた雑誌やブラ

ットフォームを見たときに、同じ媒体で掲載されている作品の主人公の年齢層や環境から、読者層を推察することができるだろう。

現在、小さなお子さん向けのマンガは作品が出にくくなっている。『小学二年生』『小学三年生』など学年誌と呼ばれていた雑誌が休刊になり、小さなおうちからマンガに触れる機会や作品が少なくなってきた。小さなお子さん向けのマンガは、コマに読む順番が振ってあり、自然とマンガの読み方が分かるようになってきている。そういう作品があるのはとても重要だが、減少している現状がある。『少年ジャンプ』という雑誌の出版社が、勉強をテーマに組み合わせた『勉強メジャンプ』を発行しており、子どもと学びに注目して、かつやや低年齢の子を主人公にするなどといった取り組みが見られる。

合わせて、選書の難しい点が、社会概念の急激な変化である。常識やルール、規範といったものが変わってきている点だ。以前はとても読まれていたとか、読み継がれているものでも、現在の感覚では合わないと感じることもある。それが悪いというわけではなく、時代に沿って変わってきているというのを認識することも必要だと思う。出版側の動きとしても、例えば『のだめカンタービレ』という作品は、愛蔵版を出すときに、作者が自分の気になるところを書き直して出すといったこともされているので、これから自館に入れる作品の動きも少し見ておくといいかもしれない。

専門図書館のサービスについて触れておく。同人誌即売会と言われるイベントの会場では、プロもアマチュアも、自分の書いたマンガや小説、それから音楽、コスプレの写真集など、そういったものも表現として持って集まって販売などをする。コミックマーケットは大きくて有名なところだと思うが、それ以外にもコミティアと呼ばれる創作のマンガを中心にした即売会、群馬でも同人誌即売会は行われている。コミックマーケットは、夏と冬に2日間行われ、基本的にそこで作品をやり取りするので、なかなか一般の流通には乗らない。2日間で25万人が集まるイベントで、全部を巡るというのはとても大変だ。ゆえに同人誌が書かれても一期一会、タイミングが難しい。そこで明治大学の米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館では、米沢嘉博さんが長くコミックマーケットに関わっていらしたという土壌があり、コミックマーケットで出品された見本誌を、収集しており、期間限定ではあるが見ることができるといったサービスをしている。かなり特殊な部分も、この専門図書館ではカバーしている。

郷土資料としてマンガを取り入れるのも大事だ。群馬では、あだち充先生や押見修造先生、それからあらみけい先生な

ど、ご活躍の先生もたくさんおられ、私が巡った図書館でも、地元ゆかりのマンガ家の色紙を飾っている図書館もあった。

茨川市の図書館は、作品の舞台となった『頭文字D』を所蔵している。羽海野チカ先生『ハチミツとクローバー』で、主人公の1人が安中の出身となっており、冬の寒い時期に安中に帰ってきて、駅から工場の様子を見て、帰郷したことを実感する印象的なシーンがある。舞台となったというのを、どこまで取り入れるかというのはなかなか判断難しいが、安中市の図書館では同作の所蔵がある。

草津の漫画堂を巡ってみた。カフェとマンガがたくさん読める場が作られている。1980年にマンガ家のグループである漫画集団が町の招きによって草津を訪れた際に、絵を残している。赤塚不二夫先生、ちばてつや先生、馬場のぼる先生といった、大御所のマンガ家たちの寄せ書きなど大切な資料を残し、きちんと町の取り組みとしてアーカイブしているというのは大変素敵なことだと思う。(草津町温泉図書館が休館日では巡れなくて残念だった。)

伊勢崎市図書館では、「群馬のマンガ」コーナーを作っていた。日本キャンパックホール図書館は、マンガとは違うが、図書館では所蔵されづらいアイドルや俳優、スポーツ選手の写真集も地元ゆかりの写真家による郷土資料として把握し、所蔵していて素晴らしいと思った。前橋市立図書館は、地元直結ではないが、「山と自転車」というコーナーでもマンガを取り入れて配架していた。このように、作家・マンガ家さんの資料、作品の資料、地域の特色といったいろんな取り組みがされている。

◆書誌

実際に本を入れるときの動きとして、本を入れて活用するためにデータをどう作っていくか、自館に収集するときにマンガで迷いがちなのが、タイトルにある記号、著者の名前のユニークさだと思う。まずは自館のルールと、記号の扱いがどのようになっているか確認するのがベーシックなところだ。国立国会図書館のように、たくさん資料を持っているところを参考にするのも1つの手だと思う。

メディア芸術データベースは無料のデータベースで、もともと文化庁の調査から発展していったデータベースだ。各地のマンガ関連施設を横断するデータベースとなっていて、マンガ・アニメ・ゲーム・メディアアートを横断的に調べることができるというのが特徴。参加館の数は多くないが、マンガ専門のところもあり、たくさんの資料、種類が多い。現在は国立美術館が運営している。

図書館での書誌作成に、図書館流通センター（TRC）のデータを買われているというところもあると思う。TRC がデータや本を扱う際、書籍扱いのコミックスと雑誌扱いのコミックスがある。書籍扱いのコミックスは ISBN コードという本の番号（管理番号）が振られている。雑誌扱いのコミックスは ISBN に加え、雑誌コード（雑誌の番号）が書かれている。書籍扱いのコミックスは、TRC でも新刊案内に掲載され、流通対象になっているそうだ。雑誌扱いのコミックスは、購入されたり、特別に購入の要望があったりなど、実績が見込める場合などにデータを作っているそうだ。

◆盗難

現場について考えると、「マンガは盗難とか紛失、心配じゃないですか」と言われることもある。2008 年書店対象の調査で、書店での万引きにおいて、マンガの率が大変高いという結果が出ている。読みたいから万引きするという理由以外に、最終的に販売が目的で万引きが行われたこともあったので、必ずしも図書館にこの調査結果が当てはまるわけではないが、懸念する状況は似ているのではないかな。なお、この調査そのものが IC タグの導入をきっかけとしており、解決策として IC タグの導入が提案されているようだが、ほかにも置き場を変えてみる、巡回してみるといったようなことが対策として挙げられていた。実際図書館の中でも、つくば市のホームページで、マンガ等などは利用者のマナーということも鑑みて、職員の目が届く位置に置くよう配置しましたという例も見られる。ただ、誰が何を借りるかはセンシティブであり、見張っているという形とはまた違う。その辺も念頭に置くことが必要だと思う。

◆購入・欠本補充

本が抜けて補充で買う場合、新刊を扱う書店はもちろん、TRC のような流通業者を通すこともあると思う。ただ紙の本自体、発行が少なくなる傾向にあり、タイミングを逃すと紙の本、紙のマンガが手に入りにくい状況になってきている。古書を利用するルートを見つけておくと、やりやすくなる。公共図書館だとマンガ以外にも古い資料を入手する機会はあると思うので、うまくルートを築いておくとよい。

マンガや雑誌や単行本というのをまとめて刊本という言い方をしている場合がある。文化庁事業の中で設けられているマンガ刊本アーカイブセンターでは、地域のコミュニティスペースの活用にマンガを提供するといった形で協力している例がある。相談先の一つとして紹介する。

◆場所

マンガの配架を考えたときに、巻が長いので場所を取ると言われることがある。人気のマンガで 100 巻を超えるものもた

くさんある。対策として、電子書籍の利用もある。物理的な場所を取らない、画面を大きくして見ることができる、また、いろんな表現形式に対応しているといった点で電子書籍のメリットがある。しかし、図書館向けのパッケージでマンガが豊富に選べるかということ、まだ潤沢ではない。図書館が契約する専門書を対象にした図書館用のパッケージだと、「マンガは対象でない」という場合もある。図書館は、電子書籍導入時に、「私たちはマンガも使いたいと思っています、マンガも利用したいと思っています」と積極的に伝えることも必要になってくると思う。

館林市立図書館はカウンターのすぐそばではないが、少し明るい感じのところにマンガコーナーを設けている。中之条町は、大きなマンガの本と小型の本を分けて置いてあり、神流町は、エッセイマンガコーナーが分けてあった。前橋こども図書館ではサッカーチームがあるので、サッカーマンガコーナーが作られていた。場所などいろいろな各館の事情に応じて展開がなされているのが伺えた。

◆現場の懸念と対応

現場の懸念と対応は「これ」という決めどころが難しいが、疑問への解決方法を見つけるために、先例が手元にあるので、それをヒントにしていけたらと思う。

<4-1. マンガを活用する 新規層を想定して>

◆集客

マンガの持つ広いイメージとして、マンガがありますよと言うと、それだけで着目してもらえるという現状がある。長野の松本市の図書館が図書館だよりの中でマンガを取り上げたら、地元のメディアが記事にした例がある。

◆展示・コラボ

2025 年 11 月から奈良県立図書館で予定されている里中満智子先生の展示は複製原画と、もともと所蔵していた情報館の資料、里中先生のマンガ作品を合わせて見られるような展示になるそうだ。

マンガの原稿・原画という点で言うと、そういったものを収集して積極的に活用している施設が全国にたくさんあるし、個人の先生をピックアップしている館がある。京都国際マンガミュージアム、横手市増田まんが美術館、北九州市漫画ミュージアムは、原画展を積極的に行い、また同時にマンガ本を読むコーナーも設けている。

北海道の士別図書館は高橋しん先生の出身地で、ゆかりの資料や作品、そして先生の原稿（高橋先生は近年デジタルで描かれているので打ち出した印刷したものになるのだが）を、

図書館の資料として所蔵し、飾り、コーナーを作って活用されているようだ。

◆サービス

大阪府枚方市の図書館では、マンガを取り入れるときに、多くの聞こえない・聞こえにくい人にとってマンガが大事な資料であるということに着目してサービスを始められた。今は聞こえない・聞こえにくい人以外からもマンガを読みたいという希望があり、どなたも読める資料になっている。

ヴィアックス大泉町図書館、富岡市の図書館では、日本のマンガを他の言語に翻訳した多言語対応として、作品を置いている。

マンガにはいろいろな特性、いい特性がたくさんある。図書館が、本の貸し借りだけでなく、情報収集源の場として、人が集まり集っていく場になるとしたら、マンガが持っている「どなたでもどうぞ見に来てください」というイメージは、大変重要な可能性がある。いろんな人に訴えかけていける力があるだろう。

<4-2. マンガを活用する 選択の幅を広げる>

◆マンガを読むメリット

「親と子の読書活動等に関する調査」（2004年文科省）では、「多くのマンガを所有している児童・生徒は本も好きでよく読んでいる」という結果が出ている。

◆学習との関係

学習と合わせて考えると、マンガは教科書の中でもよく取り上げられている。国語（光村図書、教育出版）や美術（光村図書）などの教科書に載っている。

教師志望学生の授業に同席したことがある。横浜国立大学教職大学院で国語の授業について考える授業だった。マンガ独自の物語表現技法に着目し、マンガを授業の教材としてどう使えるかを考え、積極的に意見が出ていた。授業の中でマンガを活用しよう、教材として活用しようというのはすでに前例があり、いくつも実例がある。

◆マンガは誰にでもわかりやすいのか

マンガは絵があり文字があり、同時に認識できるというのはとても分かりやすい表現の1つだが、吹き出しに書かれた文字は人が発音している言葉であり、吹き出し以外に書かれた文字は内心の声とかナレーションの声であるといったマンガ独自のルールがある。それらは誰にでもすぐに分かりやすいかということについて考えた取り組みが本にまとまっている。『障害のある人たちに向けたLLマンガへの招待』『つたえたい き

もち』また、それらを踏まえて実際のマンガを描かれたものもある。

近畿大学はアカデミックシアターという取り組みの中でマンガをたくさん所蔵している。マンガを中心に新書・文庫により構成。マンガで想像力を触発し、新書や文庫で興味・関心へと導いている。また、SNSで館内での特集コーナーや取り組みについてとてもたくさん紹介されているのでぜひご覧になってみてほしい。

◆学術研究利用

大学の研究という点で言うと、マンガ学会やマンガ研究マッピングがある。マンガの着目点を知ることができる。

桐生市立図書館は、講談社の創業者の出身が同市である関係で、今も講談社とゆかりがある。講談社からの寄贈資料を寄贈図書展示室に所蔵しており、全部を見ることはできなかったが、「国立国会図書館でも所蔵していないような資料」と思われる昔からの資料がきちんと保存しており、素晴らしいと思った。

研究利用を考えると、相互貸借は非常に重要だ。図書館間でお互いの資料を貸し借りし合う制度だが、マンガの研究者が資料を見たいこともあれば、自館に導入する参考に中身を確認したいこともあるのではないか。マンガだから断わるのではなく、相互貸借を広げていくと、図書館も利用者も便利になるかと思う。

◆学校・公共図書館では

三重県の上野高等学校では、生徒からリクエストを募って投票し、1位になったものは必ず入れる、という選挙が行われた。マンガについては、『チ。-地球の運動について-』が1位になり入れられた。先生に話を聞いたところ、催しは「生徒が図書館のことを自分ごとと思ってもらえるように心がけています」とのこと。それと同時に模擬選挙では、選挙箱と投票台を選挙管理委員会から借りたそうだ。話題になる仕掛けも上手、選挙管理委員会に話をつけるというルートを作るのも素晴らしいと思う。

神奈川県大和市図書館では、医療マンガを集めたコーナーを期間限定で作っていた。医療系と一言に言っても、医療従事者や闘病記、それから健康や体に関する内容など、取り扱いが難しいところもあり、エビデンスがあるというのを意識して行ったそうだ。マンガは確かにフィクションとノンフィクションが混ざりやすい。マンガを受け入れるときに、どういう作品でどういう意識で作られていくのかを考えてみることは必要だと思う。マンガの読書会も開催されている。同様の取組は2018年に前橋市立図書館でもマンガをテーマにした本の紹介

会をされている例が見られるが、大和市では、マンガの読書会のほかマンガを書く方を招いてマンガプロ体験というイベントもされたそうだ。普段、ティーンズを対象にしたイベントで集客に悩むことが多いそうだが、これは満員で大変手応えがあったということだ。

玉村町立図書館でも、マンガの持つ機能に注目され、「図解とマンガ」というコーナーを期間限定で作っており、とても面白いと思った。

マンガを活用していくことを考えたとき、マンガはよく「入口だ」と言われる。その入口とは、マンガがあって、その上に文章、テキストの本、さらに、トップに専門的な本があるというような階段をイメージされてしまう。しかし、そうではなく、いろんな本がある広場を自由に歩き、いろんなものが見られる、すなわち広場の入口ではないかと思う。マンガこそ、入口だけでももったいない。かつてマンガなんてと言われた分野だが、今は資料として歴史も深みもあるからこそ、繰り返し長く使われる資料だ。図書館と相性のいい資料である。

<5. マンガに活用される>

◆より広いターゲット層への認知

今までは図書館にマンガがあることで、図書館にいろんなメリットがある、利用者にもメリットがあることを話したが、ここからはマンガの分野に対して、図書館がマンガを持つメリットについて考える。マンガの編集者に図書館にマンガがあることをどう思うか聞いたところ、「商業的なマンガを作っているとき、読者層とかどういう層に読んでほしいか、かなりはっきり固定します。そこに向かって宣伝やアプローチをします。ですが、図書館は自分たちが思ってもみなかった層の人が手に取り、読者層が広がるきっかけがあると思っているので、それはとてもいいことです。」と話していた。広い層とは、年齢や性別だけでなく、環境、例えば経済的な格差もあると思う。

◆マンガを読む機会の確保

日本発のマンガが海外でたくさん読まれている。今もとても人気で誰もが知り、みんなが話題にしている作品があるが、時に、そのマンガを買うことができないから、またスマホを持ってないからアクセスできない、読むことができないとなるかもしれない。その際、資料を提供していく、利用者に見せていく図書館の中で、「マンガだからダメだ」と打ち切るのは、図書館サービスを考えると難しいのではないかと。ぜひ、いろんな人が手に取れる環境を今一度念頭において選んでいくといいのではと思う。

◆長い期間での読者へのPR

マンガを長期間図書館で所蔵することで、たとえその作品が流通しなくなっても振り返ったり、再度読むことができる。時を越えて新しい読者に手に取ってもらえるのも、図書館の大きなメリットだと思う。

マンガ家と図書館について触れておく。岸本齊史先生は岡山の出身で、岡山にいらした時によく図書館を利用されていたそうだ。図書館の席でマンガの構想を練られていたということで、2015年『NARUTO -ナルト-』の展示の中では1コーナーで地元の図書館の再現という展示が設けられたそうだ。荒川弘先生は、『百姓貴族』という作品のインタビューで、「地元の図書館に置かれていたマンガを読んで影響された」とお話をされている。このように図書館がマンガを所蔵し、サービスを行っていることで、次のクリエイティブな創造にもつながっている。

マンガ資料を持つメリットは広範囲にわたる。コミックマーケットや同人誌のところで触れたように、プロのマンガ家として全国に住んでいる方もたくさんいるし、プロでなくても趣味としてマンガを描く方もたくさんいる。発表として同人誌の即売会もあるし、インターネットなどで作品を発表することもある。自己表現の一つとしてマンガという手段を持っているのはとても豊かなことだと思う。豊かな表現方法を持っている人たちが全国津々浦々にいる中で、図書館は資料を所蔵し、そういう人を支えることもできる。たくさんの方のマンガを見てもらうのも、その表現方法の選択肢の多さにつながっていくのではないと思う。

図書館総合展という展示のオンライン企画の一つで「マンガ制作における図書館活用について」をテーマに、マンガ『新聞記者ヴィルヘルミナ』を連載しているのゆ先生という現役のマンガ家に、図書館を利用してマンガを描いているというお話を伺う機会がある。マンガを持っていることで、マンガの分野に対してアプローチできるというところがあり、描き手も、次の読み手も育てていくという意味でも、図書館は力を持っていると思う。

<おわりに>

マンガを所蔵することで図書館にメリットがあり、そして図書館にマンガを所蔵していることでまたマンガの分野にもメリットがある。この相互にメリットのある関係を、資料を通じて築くことができると思う。「マンガがあればすぐ人が来てくれる」、「ありさえすればいいだろう」ではなく、基本的に資料を収集し、保存し、活用していくという図書館のベーシックな機能と一体になってこそである。何を所蔵し伝えていくかを、図書館関係者や司書は日頃から取り組んできた。その積み重ね

をしてきた図書館司書は、マンガもそのメリットを生かすことができると思っている。

群馬の図書館を巡ったときに、いろんな図書館でマンガが読まれているところを見た。若い方、家族連れの方もいっぱいいたし、年齢が上の方も2人並んでマンガを読んでいたりと、とても熱心に読まれている姿が見受けられた。ある図書館では、日曜日お昼過ぎだったと思うが、小学生中学年程度の女の子が書架の前に来て、「これ借りる」と決めていたようで、マンガのコーナーからさっとマンガを持っていった。しばらくすると戻ってきて、「今度は何借りようかな」と、そのマンガの本棚の方で迷っている風だった。そして、もはや古典的作品に入っているくらいの作品も手にとっている様子が伺えた。マンガを図書館に所蔵していることで、「もしかしたらちょっと面白いかも」、「試しに読んでみよう」というふうにいるんな方に読まれる、それを活用する力がある。マンガは楽しくて興味をかきたて、多くの方が面白く感じるという魅力がある。それを活かし活かされるということ、図書館員、図書館と司書、図書館はやっていけると思う。そうすることで、利用者のより良い将来、豊かな将来につながっていくのではないかな。今後も、面白い資料を活用して、いい図書館を作っていけるように皆さんと取り組めたらいい、そのヒントになったらいいと思う。

トークセッション

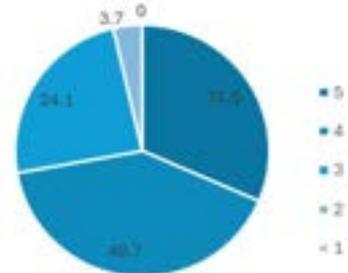
講師二人とフロアとでトークセッションを行った。短い時間ではあったが図書館×マンガのこれからの課題について忌憚のない発言が交わされた。なお、紙面構成の都合から意見交換の内容については割愛する。



アンケート

【事例報告】

事例報告の満足度（会場+動画配信）



・移転の前後でマンガ以外の蔵書に変化がないとしたら空間が変わっただけで貸出数が増えるのは素晴らしいと思った。配架も変わり、選びやすく興味を引きやすくなったのでしょうか。マンガの選定基準が明文化されていても価値観に左右される場合もあると思うので、選書会議も時間がかかり大変だと思う。しかし利用者のためやマンガ文化のためのご尽力はありがたいなと思った。

・マンガを収集する際の明確な基準(3つ)をもとに購入というお話、また、公共の図書館がたくさんマンガをそろえてくださったことで、マンガに対するマイナスな先入観を持っている方たちの考えや思いみたいなものが、プラスとしてはたいていくことができるきっかけにもなる、と感じた。

・漫画の選書基準がとても参考になった。例としてこの漫画は議論になったが結局選定につながった、また見送ったというタイトルが具体的にご教示いただけたらより参考になったかと思う。

・「マンガ」という特色を打ち出した点や、あえてマンガの貸し出しをしない点が、よく工夫されていると感じた。選書基準も合理的かつ明確で、参考になった。

・マンガを館内利用のみに制限した理由について、その背景や意図が事例報告に盛り込まれていれば、より参考になる内容になったと思います。

・「マンガの選定基準」がとても参考になった。また、新館になってからの来館者・貸出数比較も目に見えて変化があり、その点もとても関心を持った。

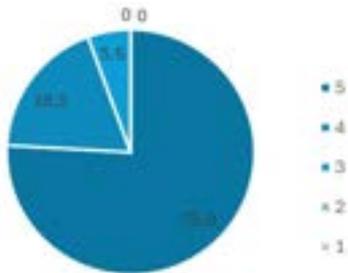
・新田図書館は私の中で漫画だけの図書館だと思っていた。実際に話を聞くと一般図書と合せて漫画が揃ってあることが分かった。しかも漫画は閲覧のみというのは少し驚いた。図書館への来館者を増やすことに漫画は貢献しているのだと思った。

・新田図書館の事例は興味深いものでしたが、着任されたばかりの館長さんより議論を重ねて資料収集を担当された現場の方のリアルなエピソードも聞いてみたいと思った。

・新田図書館のマンガ蔵書量の規模で貸出すと様々な問題が出てくると考える。閲覧のみとした新田図書館でも、来館者数が大幅に増えていて、住民の満足度は高いのだろうと感じた。来館したくなる図書館で、新田図書館のような図書館が群馬にももっと増えてほしいと思った。

【講演の感想】

講演の満足度（会場+動画配信）



・マンガの歴史、視点、作品、選書、管理など、講習の中でマンガのメリット、奥深さ、マンガの持つ豊かさが講習から、とても伝わってきた。自分の知らないことばかりだったので、とても勉強になった。まずは、明治大学米沢嘉博図書館に足を運ぼうと思った。

・漫画と図書館の関係や、それを取り巻く全国的・世界的な考え方と取り組みについてとても良くわかった。また、それだけではなく、群馬県内各図書館の特色ある漫画への取り組みも知ることができ、講師の先生は足を使ってよく勉強されているなあと感心した。漫画については、まだまだ昔の考えが残っているので、取り入れるのに勇気があるが、参考とすべき選定基準の典も示していただき、とても参考になった。

・マンガと図書館について、通時的及び共時的な話題から、俯瞰的及び身近なトピックについて網羅的にフォローされていて、マンガについて考えることはたくさんあるのだなと思った。そして群馬県内の全部の図書館をまわられたとのことで、群馬の図書館員の方達にとって、みさきさんのお話と行動力は大きい刺激になったことと思った。マンガはカバーなども保存の対象になるという話はこれまであまり気にしなかった点。小さい子供向けマンガが減ってきているのも知らなかった。

・マンガを専門的に扱う図書館があること、専門で司書をされている方がいらっしゃることで、そして群馬県内の図書館もマンガ展示に力を入れていることが分かり良かった。中学の図書館でどのように取り入れるか悩んでいたのが参考になった。本を

読むのが苦手な生徒もいるので企画展示することで図書室に来るきっかけを作ってあげたいと思った。

・マンガの収集はすでに公共図書館のベースックになりつつあるということが理解できた。また、選書や保存等、同じように課題と感じている図書館の対策について聞いたのもよかった。

・（自身の仕事の）講義の中でマンガの選書基準や管理方法についてどのように伝えればよいかと試行錯誤しているときにこちらの講演を知った。マンガが好きだという司書は多くいるが、“図書館がマンガを持つ意義”に真正面から向き合ってきた方はそう多くはないと考える。貴重なお話をありがとうございました。

・マンガが入口でその先に文章の本があるのではなく、自由に行き来できる入り口というお考えも共感できたし、社会に発行されている書籍の中でのマンガの割合が10%だから所蔵も10%を目指すというどこかの図書館の取り組み、群馬県内の図書館を回った感想など、自分だけでは収集できない情報だったので、今後の高校図書館に活かしていきたい。

・図書館にマンガを取り入れるということについて、今まではどちらかというと反対だった。でも、今回のお話で、郷土資料として展示している例もあると知り、興味がわいた。

・現在、世界的にみてマンガは、娯楽から文化を経て学術となっていること。91年前の童話やマンガに対しての親の認識が今は、童話に関しては、低学年の児童に必要な聞く力を付けるために、読み聞かせに適したものだだったので、認識が変わったのだろうと思った。マンガに関しても、子供のものという認識は薄くなり、書籍として考えて選書の対象となったのだろうが学校図書館としての選書には、学習マンガを除き、マンガは入らない。規定を考え直す時期にきているのだろうと思った。

・国内だけでなく、海外のマンガについての現状や、群馬の公立図書館のマンガを取り巻く現状が知れて良かった。大泉町立図書館には多言語の本があるのを知らなかったので、見学しに行きたいと思った。

・物を読むことから得られる知識はたくさんありマンガもそのひとつで、また日本の誇れる文化であると思ひ、数件ですがマンガ（学習マンガ以外）を所有する。講演から、マンガとは娯楽から学術へと多岐にわたっていると知った。マンガだからこそ、児童の成長や疑似体験に貢献できる力があると思った。

「図書室」の規模では、字を読むきっかけ、本が楽しいというきっかけになればと思うが、できればマンガ（作品）との出会いが児童にとって将来の糧に、夢や目標との出会いになると思った。また、地元の図書館の様々な取り組みを紹介していただき参考になった。

・マンガの選書について、学校図書館の場合はネットワークを作り意見交換ができる場が必要、というお話が特に参考になった。群馬県内はもとより、他県の情報の提供もあり、図書館でのマンガ活用について知ることができた。

・全国的な動きを熟知されている講師を招いてくださったことで、井の中の蛙から少しは脱することができたと感じる。多岐にわたる情報を整理して発信していただき、とても分かりやすかった。

・多種多様な図書館がどのようにマンガを扱っているかがわかり、大変参考になった。当館は大学図書館のため、漫画は教員による選書のみで研究分野に沿った内容のものがほとんどですが、漫画を使って図書館をどう利用してもらうかを考えることができた。

・マンガ司書という目線から、図書館や大学、コラムなど様々なご経験をふまえて、講演をしてくださり、多角的な内容のお話を聞くことができ、とても興味関心を持つことができた。

特に、2. マンガと図書館のマッチング の項目は、様々な資料・図書館での例をあげてお話してくださり、とても面白く拝聴した。明治大学の「マンガの表紙に判子やシールがかからないように保存している」という配慮には感動した。

・無駄がなく、時間いっぱいマンガについて知ることができた。マンガについて知れば知るほど、学校図書館に置くべき(基準を設けるなどして)と思ったが、現状では管理職や学校図書館担当教員の意見によって、購入出来ない学校図書館もあるようだ。新聞など管理職が目にするようなメディアで、マンガと図書館の親和性についてもっと取り上げてもらえたら、考え方も変わるのではないかと考えた。

・マンガと図書館の関わりについて詳細なお話を聞くことができて良かった。各図書館におけるマンガとの向き合い方の工夫や、日本だけでなく海外での展開についてのお話は興味深かった。91年前から現在まで、図書館に携わる方々の取り組みによってマンガの可能性が広がってきたのだと感じ、これからの図書館の可能性に思いを馳せながらお話を伺った。

・たくさんの学びがあった。早速、図書主任と情報共有したところ関心を持ってくださり校内研修の中で図書館大会での学びについて事例報告をさせてもらうことになった。みさき先生がおっしゃっていたように学校図書館における漫画資料のあり方について校内で議論する基盤が作れた。

【図書館大会の感想】

・図書館大会という集まりでマンガを取り上げるのはとても珍しいのではないと思う。その点がまずチャレンジだなと思った。

・群馬県図書館大会は久々の参加だった。開催形式が変更され、規模が縮小されているのに驚いた。存続も危ぶまれるのではと感じてしまった。

・図書館における蔵書の転換期になりそうな時期に、情報を網羅した講演とその配信はとても意義があると思った。

・動画配信で、自身のペースでじっくり聞くことができたので大変助かった。動画配信をしてくださり、ありがとうございました。

【当日の様子】



大会参加者数及び動画視聴回数

大会参加者数			187人
	対面	100人	
		一般参加者	67人
		来賓及び運営スタッフ	33人
	後日動画配信	87人	

動画視聴回数			311回
	事例報告「蔵書再構築～マンガ文化拠点の挑戦～」	144回	
	講演「図書館におけるマンガの可能性」	167回	

大会運営委員

【群馬県図書館協会 運営委員】

運営委員長	群馬県立図書館 次長	
運営委員	公共図書館協議会	前橋市立図書館
		高崎市立中央図書館
		沼田市立図書館
		安中市図書館
		大泉町立図書館
	大学図書館協議会	群馬大学総合情報メディアセンター
		高崎健康福祉大学図書館
	高等学校教育研究会図書館部会	群馬県立館林女子高等学校
		群馬県立館林女子高等学校
	小中学校教育研究会学校図書館部会	前橋市立第五中学校
		前橋市立新田小学校
		群馬県立図書館

第 21 回群馬県図書館大会報告書

2026 年3月 31 日発行

《編集発行》

群馬県図書館協会事務局

〒371-0017 群馬県前橋市日吉町 1-9-1

群馬県立図書館内

TEL 027-231-3008 FAX 027-235-4196